

新・下野市風土記

律令時代の年末行事



下野市教育委員会 文化財課

令和3年も、あとわずかとなりました。人々が、新しい年が今年より良い年となるよう願うようになったのは、1年という単位を決めたころからでしょうか。あるいは、暦こよみが生まれるより前、自然の摂理を利用して1年という概念を数えていた頃から、人々は同じように願っていたのでしょうか。

去年から今年にかけて生きた私たちのことを100年後の人たちが振り返るとき、「あの時代の人たちは、来年こそは良くなりますようにと特に願っただろうね」と思いを馳せるのかもしれませんが。

古代の歴史を知るための貴重な史料に、当時の国家によって編さんされた、『日本書紀』をはじめとする六国史と呼ばれる歴史書があります。中でも、奈良時代のことを知るための第1級史料として用いられるのが『続日本紀』です。『続日本紀』は、持統天皇11(697)年に持統天皇が譲位し、文武天皇が即位した年から始まります。

現代においては、新年だけでなく年越しも一大イベントです。しかし、『続日本紀』を読み進めていくと、新年についての記事は丁寧に記されていますが、11月や12月頃、いわゆる年末については、特別なことがあまり記されていないことに気が付きます。

例えば慶雲3(706)年の12月1日には、日食があったことが報告されています。その後には「是年、天下の諸国に疫疾あり。百姓※多く死す。始めて土牛を作りて大きに儺なふ」と記録されています。この年は疫病が全国的にまん延し、多

くの人たちがその疫病のために命を落としたため、土で馬(土牛とありますが、馬です)の形代しろしろを作って儺な(追儺ともいう。疾鬼を追い払う行事)を初めて行ったのです。

この土でつくった馬は、現在「土馬」と呼ばれる遺物に相当し、大きさは20cmから25cmほど。平城京などの都の跡では、道路の側溝や運河などの水に関わる場所から出土します。

なぜ馬の形代を作ったかには、いくつかの説があります。ひとつには、疫病神は馬に乗って行動すると考えられていたことから、災いをもたらす疫病神を土馬に乗せて穢れとともに水に流したと考えられています。また、雨乞いと関係あるのではないかとする説もあります。

※この時代の「百姓」は必ずしも農民を指す言葉ではありませんが、庶民の大多数が農業に関わっていました。

儺なについては、平安時代の中頃に記された『蜻蛉日記』に「しはすつごもりがたに〈略〉つごもりの日になりて、なといふ物心みるを」と記されていることから分かるように、宮中の行事です。

この儺なという風習は、中国から日本に伝わったもので、日本ではこの慶雲3年に初めて行われました。中国では3月、8月、12月の年3回行われていたようですが、日本では6月と12月に行われるようになりました。

昔は、季節の変わり目には邪気が入り込みやすいと考えられていたことから、このような行事が発展していったと考えられます。

6月に行う「夏越なごしの祓はらえ」は、半年分の穢れを落として無病息災を祈願する行事です。奈良時代には、厚さ5mmほど、大きさ15cmほどの木の板ひとがたに切り込みを入れて作った人形や、板ガム程

度の大きさの銅板を加工した人形を作り、それに半年分の自分の穢れや病を移し、水に流す習俗が生まれました。庶民や下級官僚は木製の人形、高級官僚などは金属製の人形を使用したのかもしれませんが。

現在も、各地の神社にこの習俗が残されており、溶けてなくなる紙で作られた人形を使用するところもあります。

12月に行っていた儺なは、やがて邪気や災いの象徴である鬼を豆まきで追い出すかたちに発展し、今の私たちがよく知る節分として民間にも定着していきました。

来年こそは疫病が終息し、良い年が迎えられますように。